

高齢者の文化芸術振興に関する

# 提言書

令和7年7月

アーツカウンシルしずおか

## はじめに

この提言書は、アーツカウンシルしずおかの事業実績と調査研究に基づき、高齢者の健康寿命延伸などに資する文化芸術の関与についてまとめたものである。

静岡県における65歳以上の高齢者人口は2024年に約110万人となり、総人口に占める割合（高齢化率）は30.7%と過去最高を更新した。団塊の世代が85歳以上となる2035年には約112万人（高齢化率34.7%）に達し、県民の3人に1人が高齢者となる見通しである<sup>1</sup>。静岡県においても、高齢化は世界に例を見ない速度で進行している。

このような超高齢社会の到来は一般に社会的課題として語られるが、そもそも「老いること」は人生の偉業であり、祝福されるべき段階である。しかし、現代社会において老いは忌避され、若さの保持が強く求められるようになった。多くの人々が老いることに対して漠然とした不安を抱え、老いを隠し、避ける傾向が社会全体に広がっている。

また、静岡県が県内18歳以上の男女700人を対象に実施した「令和6年度文化に関する意識調査」の文化芸術活動が自身に与えた効果や影響を問う設問で、70歳以上の回答者では「家族や友人と感動を分かち合い、交流が増えた」と答えた割合が最も高く（14.4%）、文化芸術が高齢者の社会的関係を促進する有効な手段であることが一定程度示されている<sup>2</sup>。

アーツカウンシルしずおかは、2021年の設立から継続して、高齢者の表現活動に着目し、その独自の芸術表現を「超老芸術（ちょうろうげいじゅつ）」と名づけ、その発掘と紹介を行ってきた。その一環として、2024年度には健康意識の高いアクティブシニア1,053名と高齢者施設の利用者380名を対象に、表現活動の実態把握を目的としたアンケート調査を実施した。また、2025年1月から2月にかけては、この超老芸術を活用したモデルプログラムとして、県内3か所の高齢者施設で対話型鑑賞会および創作ワークショップを実施した。

これらの事業から得た情報と、これまで芸術を活用した地域振興事業を支援してきた知見から、文化芸術の効果的活用による、人とのつながりなどの社会関係づくりや、自己肯定感増進やアイデンティティ強化、新たな生きがいや目標の発見など、高齢者支援への有効性を見出し、以下に提言をまとめる。今後、関係各部署との連携を図り、提言内容が各種政策に反映されることを期待したい。

---

<sup>1</sup> 静岡県『令和6年度静岡県高齢者福祉行政の基礎調査』、1-14頁。

([https://www.pref.shizuoka.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/022/552/hp.pdf](https://www.pref.shizuoka.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/022/552/hp.pdf))

<sup>2</sup> 静岡県『令和6年度文化に関する意識調査 調査結果報告書』、29頁。

([https://www.pref.shizuoka.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/018/844/r6tyousa.pdf](https://www.pref.shizuoka.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/018/844/r6tyousa.pdf))

## 高齢者の文化芸術振興について、7つの提言

### 提言 1

#### 高齢者自らが主体的に文化芸術に関与する機会を

「文化芸術推進基本計画(第2期)」によると、文化芸術の振興にあたっては、性別、年齢、障害の有無にかかわらず、誰もが文化芸術活動に参画し、文化芸術の価値を享受できる環境を整備することが重要であると謳われている。障害者に関しては、2018年6月に「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が公布・施行され、鑑賞や創造の機会の拡大、作品等の発表の機会の確保など、「障害者等による文化芸術活動の推進」に関する施策の総合的かつ計画的な取組が行われているだけではなく、全国各地に支援センターが設置されるなど、国家規模でその支援の輪が広がっている。翻って、高齢者の文化芸術活動に対しては、障害者の芸術活動のような法整備や計画や支援はなく、「シニア割引」に代表される鑑賞支援以外は手付かずの状態となっており、未だにその活動は余暇活動の延長としてしか捉えられていない場合も多い。

これまで高齢者を対象にした文化芸術活動といえば、福祉施設等でレクリエーションの一環として行われる芸術療法や、文化施設などでの鑑賞機会を提供するアクセシビリティ向上の取組が中心だった。しかし、1990年代後半からはアーティストが福祉施設等を訪問してワークショップを実施するなど、参加体験型のアウトリーチ事業が盛んに行われるようになった。このような参加体験型の活動では、高齢者の失われていたと思われる能力が引き出され、表情が豊かになったり、言葉が出せるようになったり、集中力が高まったりするなどの変化が観察されるという報告がある<sup>3</sup>。

アーツカウンシルしずおかが実施したアクティブシニア層に対する調査では、文化芸術の鑑賞や活動を行わなかった理由として「きっかけがない」(約50%)が最も多く、男性では「興味がない」(28.4%)との回答も高い割合を示している。上記のような文化芸術によるポジティブな効果を得るためには、参加体験型の取り組み導入と併せて、適切な「きっかけ」や「機会提供」の必要性が読み取れる。

そこで、文化施設や地域の拠点において、高齢者が気軽に集い、参加できる環境の整備を望む。また、単なる鑑賞機会の提供にとどまらず、高齢者が自ら表現したり、他者とのコミュニケーションを図ったりすることができるような「参加型」「共感型」の文化芸術活動を展開することで、心身の健康の維持・向上や社会的孤立の防止につなげることを期待したい。

---

<sup>3</sup> 古賀弥生「アートとケアの接点を支えるのは誰か——高齢者施設における芸術体験活動に関する環境整備・考」『アートミーツケアオンラインジャーナル』Vol.7、2016年、76頁。[https://artmeetscare.org/wp-content/uploads/2017/03/6\\_Y\\_Koga\\_76\\_87.pdf](https://artmeetscare.org/wp-content/uploads/2017/03/6_Y_Koga_76_87.pdf)

## 提言 2

### 高齢者を対象にした対話型鑑賞プログラムの充実を

高齢者が自己を語ることは過去への執着や繰り返言などとして否定的にみなされることが多く、本人が自発的に語る機会は家庭だけでなく社会のさまざまな場面で失われている。しかしながら、高齢者による回想は単なる現在からの逃避や過去を懐かしむだけの行為ではなく、老年期の発達課題である自我の統合を促進するための手段となっている<sup>4</sup>。そうした受け皿のひとつとして、「対話型鑑賞」の機会を提案したい<sup>5</sup>。

アーツカウンシルしずおかが高齢者施設で実施した対話型鑑賞会では、作品を鑑賞した高齢者から自由奔放な意見が出ていただけでなく、子どもの頃を回想した思い出話や「この絵は嫌い」という忌憚のない意見も聞くことができた。

静岡県内では時折、対話型鑑賞の機会が美術館やギャラリー等で開催されているが、高齢者に特化したものは皆無である。高齢者に特化した対話型鑑賞は心身の健康の一助となるだけでなく、文化施設にとっても平日の利用者拡大につながる可能性を持つ。文化施設や社会教育施設での対話型鑑賞の実施促進や、高齢者施設での発達課題への取り組みの一環とするため、対話型鑑賞ファシリテーターを派遣する制度を設けるなどして、現場や日常レベルでの対話型鑑賞機会の拡充を望む。

## 提言 3

### 高齢者施設等で文化芸術活動の導入を

高齢者個人の心理に働きかける文化芸術活動として、1970年代から老人保健施設や通所デイケアなどで芸術療法が行われてきたが、クレヨンや粘土を使った創作を幼稚に感じてしまう高齢者も数多存在している。そして、「遊び心を持たず、仕事一本で数十年を過ごしてきた人たちにとっては、画材を手渡されても何を作ったら良いのかわからないことも多い」という意見もあることから、気持ちに向き合うことや自由に表現することを目指した芸

---

<sup>4</sup> Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1990). 老年期：生き生きしたかわりあい (朝長正徳・朝長梨枝子 訳). 東京：みすず書房. (Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). Vital involvement in old age. W. W. Norton.)

<sup>5</sup> ニューヨーク近代美術館(MoMA)で高齢者や認知症の方を対象に開発された鑑賞教育プログラムである「対話型鑑賞」は、ファシリテーターの進行のもと、グループでひとつの作品を観ながら自分の発見や感想、疑問などを共有しながら話し合う、鑑賞者同士のコミュニケーションを通じた鑑賞法として、近年では、美術・教育分野のみならずビジネスや医療分野でも注目されている。

術療法は、長い人生を生きてきた高齢者にとっては難しい点もある<sup>6</sup>。

芸術の長い歴史をみると、人間の複雑な側面や社会の矛盾、攻撃性や破壊性も範疇に含んで表現することが、本質的な芸術の主題として繰り返し表されてきた。それは本人の主体的な表現を担保することにもつながっているが、療法的なアプローチでは、説明がしやすく穏やかな癒しの側面に焦点を当てた造形だけが扱われやすい傾向があり、芸術が本来持つ力を活かすことができず、本人の主体性を制限してしまう危険性がある<sup>7</sup>。加えて、芸術療法においては支援者などの干渉によって、作品の生々しい価値が弱められてしまうことへの懸念もある。

アーツカウンシルしずおかが高齢者施設で実施した絵画制作ワークショップは、多くの高齢者にとって、支援員のサポートを受けることなく、初めて自由に絵画を描くことができる機会となり、これまで文化芸術に興味を示さない人が夢中になって絵を描く姿も見られた。このことから、高齢者施設等で高齢者の主体性に寄り添った文化芸術活動がプログラムとして導入されることを望む。

その推進を支える仕掛けとして、ケアと文化芸術の架け橋となる人材、すなわち高齢者への理解と芸術的視点の両方を持ち合わせたアーティストや支援員の育成を求めたい。こうした人材が育成され、施設に配置されることで、高齢者一人ひとりの個性や背景に応じた柔軟で創造的なプログラムの実施が可能となり、文化芸術活動が単なるレクリエーションにとどまらず、自己表現や他者とのつながりを深める手段として機能することが可能となる。また、医療・福祉・文化芸術の連携が強化され、その派生活動の発生も見込まれることから、地域社会全体で高齢者を支える基盤構築に寄与すると考えられる。

## 提言 4

### 超老芸術の認知拡大を

アーツカウンシルしずおかでは、高齢になっても行われる独創的な表現活動を「超老芸術」と名づけ、これまで県内の高齢者を中心に、その魅力の発掘紹介を続けてきた。2023年10月3日よりグランシップで開催した初の大規模展では、22組1,500点以上の作品を展示し、6日間で1,767人が来場。来場者アンケートでは、60代以上の来館者が半数以上を占め、アンケート回答者の半数以上が「何か表現活動を試してみようと思った」と答えるなど、観覧者の表現活動を触発する機会になるとともに、静岡県内の高齢の出展者が自主的に在廊し作品解説をするなど、出展者自身のQOLの向上にも繋げることができた。

アマチュアであるが故に芸術に関する専門的な素養を有しているわけではないが、思い

---

<sup>6</sup> 齋藤佐智子「高齢者ケアとコンピュータ・アートセラピー」『バイオメカニズム学会誌』第30巻2号、2006年、バイオメカニズム学会、56頁。

<sup>7</sup> 栗山裕至「美術教育における療法主義的発想からの転換」『美術教育学』25巻、美術科教育学会、2004年、173頁。

もよらぬ方法で次々と生み出される創作物は、技巧や作品の完成度という観点から言うと不十分な面もある。しかしながら、それを遥かに凌ぐ、従来の考え方や文法にとらわれない自由で活力に満ちた表現の豊潤さこそが超老芸術の魅力であり、つくり手である高齢者の生きる力を呼び覚まし、人生に希望や活力を与えてくれる。

アーツカウンシルしずおかでは、こうした創造性は誰にでもあると考えており、「みんなが表現者」になることを目指している。「超老芸術」に関する特番がNHKで2週続けて全国放送され、単行本を刊行するなど全国的には話題を集めているが、県内で十分に浸透しているとは言いがたい。この「超老芸術」という言葉を広めていくことで、さらに多くの高齢者たちの創造性が開花する可能性がある。

あわせて、「すこやか長寿祭美術展」のような取組は行われているが、長野県の松本市美術館で20年前より開催されてきた70歳以上の美術公募展「老いるほど若くなる」のように、県内の美術館や公的なアート機関が主体となった作品発表の場が増えることを望む。

演劇未経験者を含む60代から90代の約1,600人による《ロミオとジュリエット》をベースにした群集劇「1万人のゴールド・シアター」や「老いと演劇」をテーマにした劇団OiBokkeShi（オイボッケシ）など、演劇分野においても高齢者が主体となる取組が行われていることから、各分野で「超老芸術」の取組が展開されていくことを求める。

## 提言5

### 高齢者が自らの人生を語ることを起点にした取組の普及を

高齢者に対する自立支援や重度化防止に関する取組は国をあげて推進されている。一方で、予防に重点が置かれた取組からは、すでに要介護状態となり、顕著な改善が望みにくい高齢者が取り残されている可能性も否めない。そうした人たちへ求められる支援とは、最期まで希望を持って生き続けることである。提言3、4において、高齢者自身が創造的活動を行うことに触れたが、要介護状態にある高齢者や、これまで文化芸術に興味関心を抱いてこなかった高齢者にとっては、自らが創造的活動を行うことにハードルがあったり、抵抗感が生じたりする。そうした場合には、提言2で挙げた対話型鑑賞プログラムも有効であるが、その真意は、これまで生きてきた自らの人生を共に振り返り、想いを共有する仲間との対話や、生きる意欲を支えるつながりの回復にある。

介護現場でのコミュニケーション技術として「傾聴」が重視されているが、強調されるのは、高齢者が語る言葉の内容そのものではなく、さまざまな応答技法によって、こちらが聴いているということを非言語的に相手に伝えるという、聞き手側の姿勢や態度の発信に重きが置かれている。

ここでは、高齢者が自身の人生を語ることを起点にした「ナラティブ・アプローチ」の取

組を提案したい<sup>8</sup>。静岡県沼津市にある小規模デイサービス「すまいるほーむ」（管理者：六車由実）では、高齢者が自らの人生を語り、それを正確に記述し解釈する「聞き書き」が実践されている。また、静岡県賀茂郡西伊豆町で介護事業所を運営しているNPO法人みんなの家（代表：奥田俊夫）が行っていた「人生紙芝居」は、ひとりの高齢者の人生を聴き取り、その「物語（narrative）」に基づいたストーリーを紙芝居に仕立て、皆の前で上演する取組だった。これは文化芸術を介護現場に手段として取り入れた「アートプロジェクト」であると言える。人生紙芝居は、介護現場において新たなレクリエーションプログラムを提供するだけでなく、被介護者やその家族が自分らしさを発見し、自分が備えている能力やスキルを自覚することにつながるものである。

「傾聴」と比較すると、「ナラティブ・アプローチ」は相手との対話とその内容に重点が置かれ、工夫次第で被介護者はもちろん、家族や職員を巻き込んだ展開を生むことも可能にする。制作過程において支援者と高齢者の親密な信頼関係を形成し、それまで否定的にとらえてきた高齢者の経験をプラスに転化させることも報じられている。それは施設の中しながら、被介護者を中心とした新たなコミュニティが形成されることだとも言える。

また、地域の記憶を次世代へ継承し、高齢者が地域において多くの経験や長年の暮らしを通じて培われた知見の持ち主として再認識され、多くの人たちが敬老精神を養うことにもつながる、この取組の訴求推進を期待する。

## 提言 6

### オンデマンド交通の充実を

高齢ドライバーによる事故のリスクを下げるため、高齢者に対して免許返納を求める動きは加速している。ところが、免許返納後に高齢者が選択できる移動手段は限られているため、高齢者が外出して文化芸術へアクセスすることは困難になっている。

県内の高齢者施設の利用者へ行ったアンケート調査では、およそ 6 割が文化芸術の必要性を訴えたが、文化芸術活動を行わなかった理由として「移動手段がない」が全体の 22.6%と最も高く、文化芸術活動の面においても高齢者にとって移動手段の確保は喫緊の課題であると言える。

全国の自治体では高齢者に外出を促して健康増進を図ることなどを目的に、1970 年代以降、主に交通網の整備された都市部で公共交通機関を安く利用でき、割引分は自治体が負担する「敬老パス」が導入された。しかしながら、高齢者の増加に伴う財政負担がネックとなっていることから、各地で見直しや廃止が進んでいる。

こういった課題解決のため、利用者の予約に応じて運行する乗り合い型の公共交通サー

---

<sup>8</sup> ナラティブ・アプローチとは、個人や集団が語る「物語（ナラティブ）」に注目し、その物語を通じて意味を理解し、支援や介入を行おうとする方法論で、心理学、福祉、医療、教育、カウンセリングなど、さまざまな分野で活用されている。

ビスである「オンデマンド交通」が、富士市の「のるーとひまわり」（富士急静岡バス株式会社）や藤枝市の「ふじえだ mobi（モビ）」（静岡鉄道株式会社）などで導入され、官民が連携した「しずおか MaaS（しずおか MaaS まちづくり推進協議会）」の取組などが実施されているが、十分な供給ができていないと言え難い。「“ふじのくに”地域公共交通計画」などで公共交通サービスの拡充は謳われているが、文化芸術の面からも一層のサービスの体制確保を求める。

## 提言 7

### 文化芸術の活用による高齢者支援と健康長寿の推進を

アーツカウンシルしずおかが実施したアンケート調査によれば、約 8 割の高齢者が文化芸術活動を行っているときに「生きがい」を感じていることがわかった。これは、文化芸術活動が高齢者にとって精神的な充足感や生活の質の向上に寄与していることを示している。生きがいを持って暮らす高齢者が増えることは、健康状態の改善、認知症やうつ病の予防、そして社会参加の促進につながると考えられる。

2023 年、静岡県の 75 歳以上後期高齢者の医療費総額は約 5,137 億円で、2019 年の約 4,543 億円から 594 億円上昇した<sup>9</sup>。これは主に医療技術の進展によるもので、重篤疾患の治療機会が拡大し、生存率向上と長期的な医療介入の需要が拡大している。また、高齢者人口の拡大も医療費の負担を増やしている。静岡県の一人当たりの医療費は全国平均を下回るが、生産年齢人口の減少が加速する中、予防医療の強化と医療提供の効率化による医療費の適正化は喫緊の課題と言える。

そこで、予防医療を推進する具体策として、文化芸術への積極的な参加を高齢者にも求めていくことを提案したい。いつまでも元気で活躍する高齢者が増えることは、介護給付費や医療費の削減に有効であるだけでなく、外出機会や社会参加が増えることで、衣食や娯楽、交通、文化芸術関連サービスなどへの支出が促され、高齢者自身の消費活動を活性化させるきっかけにもなり得る。

介護を必要とせずに健康的に生活できる期間を示す「健康寿命」において、令和 4 年の静岡県は、男性 73.75 歳、女性 76.68 歳と、男女ともに全国 1 位を記録している。県では現在、「運動」「食生活」「社会参加」を三本柱とした健康づくりに取り組んでいるが、ここに「文化芸術」という視点を加えることで、さらなる健康寿命の延伸と生活の質の向上を期待したい。

さらに、医療的な対応にとどまらず、地域活動や社会参画といった人同士のつながりの強化を通じて心身の健康を支える「社会的処方」の取組も有効だと考えられる。特に、「社会的処方」を援用し東京藝術大学が開発を進める「文化的処方」のように、文化芸術活動を活

---

<sup>9</sup> 静岡県後期高齢者医療広域連合『令和 6 年度（令和 5 年度実績）静岡県後期高齢者医療の概況』、20 頁。

用した取組は、高齢者の精神的な充実や自己肯定感の向上、孤立感の軽減、認知症の予防などに寄与する具体策として期待できる。

今後、さらに高齢化が進むことが見込まれる中で、高齢者が生きがいを持ち、地域で健やかに暮らし続けることのできる環境づくりが求められるだろう。「幸福度日本一」を目指す静岡県において、豊かな自然環境や整備された生活インフラに加え、文化芸術を活用して地域に根ざした人間関係や資源の活用を進めることは、県民の暮らしの質を高める一助になると考えられる。

アーツカウンシルしずおかがこれまで行ってきた社会実験を通じ、静岡県は、文化芸術を活用した高齢者支援の取組を全国に先駆けて推進していると謳っていきたい。そのためには、文化芸術活動を活用した静岡県独自の「社会的処方」の導入を検討し、県民一人ひとりがより豊かで幸せな人生を送るための環境整備を共に進めていただきたい。

## 参考資料

### ■ 「高齢者による表現活動の実態調査」のアンケート調査の概要

高齢者による表現活動の実態調査	
調査対象者	県内で健康意識が高い傾向にある活発な高齢者であるアクティブシニア
有効回答数	1,053 名
調査期間	令和 6(2024)年 6 月 4 日～令和 6(2024)年 8 月 30 日
調査方法	WEB アンケート (タブレットやスマートフォンから回答フォームへアクセスして回答)

高齢者による表現活動の実態調査	
調査対象者	高齢者施設の利用者
有効回答数	380 サンプル(645 部配布)
調査期間	令和 6(2024)年 12 月 9 日～令和 7(2025)年 3 月 21 日
調査方法	調査票を郵送配布

### ■ 「高齢者による表現活動の実態調査」のアンケート調査結果の概要

- 直近の 1 年間で文化芸術を鑑賞した高齢者の割合はアクティブシニアでは 6～7 割、施設利用者で 4～5 割となっているが、文化芸術活動を行っている高齢者の割合はアクティブシニアで 35%、施設利用者で 23.7%と少なくなっている。活動を通して文化芸術に親しみ関心を持つ機会の充実が課題となっている。
- 鑑賞しなかった・活動を行わなかった理由としては、アクティブシニアでは「きっかけがない」(約 50%)が、施設利用者では「移動手段がない」(22.6%)が最も多く、男性においては「興味がない」(28.4%)の回答率も高くなっていることから、何らかのきっかけや機会の提供が求められている。
- 文化芸術活動を始めたきっかけとしては、アクティブシニアと施設利用者ともに「楽しみや趣味として」と答えた人が 6～7 割にのぼるなど、文化芸術が個人の楽しみや趣味として大きな役割を果たしていることが分かる。
- 高齢者が 1 ヶ月に文化芸術活動へかける費用としては、2,000 円以下や 5,000 円以下と少額だが、アクティブシニアでは 7%、施設利用者では 4.4%の高齢者においては 15,000 円～20,000 円と多額の費用を文化芸術活動へ費やしていることから、文化芸術に関わる活動が活性化すれば、関連する投資が増える展開も考えられる。
- アクティブシニアと施設利用者ともに、約 8 割の高齢者が文化芸術活動を行っているときに生きがいを感じており、高齢者にとって文化芸術活動が精神的な充足感や生活の質の向上に寄与していることを示している。
- 「文化芸術活動は不要」と回答した人は、年代が上がるにつれて低くなる傾向になり、

年をとってから文化芸術の必要性を感じている人は多い。

■モデルプログラム「高齢者施設における超老芸術作品を通じた対話型鑑賞と絵画制作ワークショップ」の概要

モデルプログラム 「高齢者施設における超老芸術作品を通じた対話型鑑賞と絵画制作ワークショップ」	
概要	静岡県内の3つの高齢者施設において、超老芸術の作品を使った対話型鑑賞と超老芸術のつくり手本人による絵画制作ワークショップを1回ずつ実施した
実施期間	令和6(2024)年12月10日～令和7(2025)年3月21日
実施施設	① 医療法人 友愛会グループ(静岡県沼津市) 通所リハビリテーション「デイケアさとやま」 住宅型有料老人ホーム「聖人の家 風のガーデン」 ② デイサービスすまいるホーム(静岡県沼津市) ③ 医療法人社団緩和会 掛川東病院(静岡県掛川市) 介護老人保健施設 桔梗の丘
参加者数	① 医療法人 友愛会グループ(静岡県沼津市) 【対話型鑑賞】8名【絵画制作ワークショップ】9名 ② デイサービスすまいるホーム(静岡県沼津市) 【対話型鑑賞】9名【絵画制作ワークショップ】9名 ③ 医療法人社団緩和会 掛川東病院(静岡県掛川市) 【対話型鑑賞】11名【絵画制作ワークショップ】11名
協力作家	本田照男(1946年～2025年) 沼津市内で、1969年に焼肉店を開業。60歳になったある日の夜に、ラジオからバッハの《マタイ受難曲》が流れてきた際、自動筆記により初めて絵を描く。以後、絵画制作を中心とした暮らしを送るようになる。

■実施結果の概要

- 対話型鑑賞の作品提供及び絵画制作ワークショップで「つくり手」として協力いただいた超老芸術作家の本田照男氏は、参加者と年代が近く、60歳から絵を描き始めたことやその半生が語られたことで、参加者から強い関心や親近感が寄せられた。
- 当初は、本田氏のカラフルで抽象的な作品に対して、どのように見れば良いのかと戸惑いや不安を覚える高齢者もいたが、対話型鑑賞ファシリテーターや本田氏の言動などから「自由に感じて良い」「自由に描いて良い」ということを理解し、次第に気持ちが解放されていった。その結果、対話型鑑賞では思いがけない発想や発言が生まれ、絵画

制作では、普段あまり興味を示さない人が夢中になり、施設スタッフたちも「こんな発想をするんだ」「こんな絵を描くんだ」といくつもの新たな発見があった。

- 多くの介護現場では、高齢者の自尊心を傷つけないために施設スタッフらがサポートをして作品を完成させることが多いが、本ワークショップでは、そこから逸脱して初めて高齢者が自由に絵画を描くことができる機会となった。

#### 【対話型鑑賞】

- 普段から文化芸術を好んでいる方や認知の面で衰えない方などは、模範的な回答が多く、他人の意見を受けて自身の考えを述べるなど、対話の場が生まれていた。
- 一方で、絵画を見慣れていない認知症の高齢者からは、自身の人生や趣味、体験の記憶を掘り起こし、作品と結びつける唯一無二の発言が飛び出した。
- 肯定的な意見だけでなく、否定的な意見も交わされ、同じ絵画を見ても、それぞれ感じ方が異なることが共有された。
- 鑑賞時間の中盤以降になると、「この作品には何か物語があるんでしょうね」「この人はいろんな色を使っているから心の豊かな人だと思う」「この人は整理整頓ができない人だね」など、作者の思いや人物像について言及する発言が出ていた。

#### 【絵画制作ワークショップ】

- 「丸三角四角を繰り返し描けば、誰でも絵は描ける」ことが本田氏から何度も告げられ、参加者間で上手い下手ではなく楽しむことを重視する感覚が共有された。
- 同じ机で本田氏が丸三角四角を繰り返して絵を描いていることが、参加者にとっては創作の助けとなっていた。
- 絵を描いて終わりではなく、本田氏は「どの向きがあなたの心に一番しっくりきますか」と参加者に投げかけ、絵の完成後に参加者のサインを促すだけでなく、「僕たちが天国へ行った後も必ず絵は残る、この絵を飾っていたら、家族がきっと思い出してくれます」「良かった、次の日も描いてください。どんどん作品が溜まってきたら、毎日気持ちは明るくなるはずです」と個々の表現を絶えず尊重し、作品を残すことの大切さを呼びかけていた。
- 普段から参加者を見守っているスタッフらは、会話が難しかったり、感情の起伏が見られたりすることが多い参加者が熱心に絵を描く姿に驚きの声をあげていた。
- 制作後は参加者全員の絵画を全員で鑑賞し、当初は「こんな絵を見せなくても良いよ」と謙遜していた人が、本田氏より「心の綺麗さが表れている、素敵な絵だ」とコメントを受けると「部屋に飾る」と嬉しそうな顔を見せていた。

<連絡先>

アートカウンシルしずおか

静岡市駿河区東静岡2丁目3番1号

グランシップ1階

担当：櫛野展正

TEL：054-204-0059

Mail：[info@artscouncil-shizuoka.jp](mailto:info@artscouncil-shizuoka.jp)